

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:

腎がん終末期患者の地元への移住を自己実現した意思決定支援

旭川医科大学病院 外来ナースステーション

○内田瑠美、鎌仲知美、田中理佳

【目的】

腎がん終末期患者が余命宣告後2か月で、地元で最期を過ごす意思決定をした心理過程と看護介入を明らかにする。

【事例概要と実践方法】

対象は腎がん（StageⅣ）50歳代男性。長期の薬物治療後、BSCにて治療中断となった。友人のいる地元を最期の住処に意思決定した経過を質的記述的に分析し後ろ向きに看護記録、診察記事よりデータ抽出した。

【結果】

全60のコードを分析し26のカテゴリーが抽出された。

治療期は〈改善しない症状への戸惑い〉を表出し〈症状の変化を自覚する〉〈精神面への影響を自覚する〉ことが出来ていた。〈介護サービスを意識〉していたが〈支援者となる家族は決めていない〉状況だった。治療継続は〈症状改善への期待〉に繋がっていた。

BSCへの移行期は〈症状の変化を自覚し対応する〉こと継続し〈介護サービスを導入する〉準備を進めていた。〈まだ時間があると認識している〉理解不足からICを設定し〈DNARを希望する〉〈身体症状の改善によるQOLの向上を望む〉〈友人がいる地元での最期を望む〉ことを意思決定していた。真実を知り〈想像以上の予後の短さに混乱とあせりを生じながら行動する〉ことが出来ていた。

地元移住への決断期は〈地元で最期を迎える決断と行動をする〉準備が出来、移住予定だったため〈介護申請に迷う〉こともあったが〈介護申請を決意〉し〈チャンスがあれば治療を再開したい思い〉を残し〈医療者への感謝〉を伝え地元移住の自己実現をやり遂げた。

【考察】

治療期からBSC移行期の中で予後認識の乖離が分岐点となり、看護師によるICの設定で、残された時間の生き方と対峙するきっかけを作った。語る場の設定、傾聴、ニーズへの情報提供、多職種と連携したことで短期間で認識の修正に至った。最期を地元で迎える目標は患者自身をエンパワーメントし患者の持つ力を高めていった。自己実現を支えた看護介入は、患者の内在する力を引き出す有用な意思決定支援となっていた。